

薄氷が張り、指先を刺激した。ここで、しばらく思想教育が始まった。調子を合わせ、聞いているふりはしているが、だれも本当には聞いてはいない。

ようやく乗船の番が来た。まるで汚れたシベリアのあかを洗い落としてくれるかのような小雨降るタラップを登りつめると、船長さんが「苦勞さまでした。この船は明朝舞鶴の港に」の声とともに、疲勞と安心感が交差して、一筋の熱いものが甲板をぬらした。四十数年過ぎた今でも腦裏から離れない。船名は恵山丸。こんこんと照りつける五月の太陽。傷ついた私どもをいたわってくれるかのような葉の花も、ほほ笑んでいるかのように見えた。そして、五月二十日過ぎ、赤い夕日の沈む夕刻、故郷鹿野山の北のふもと、家族の待つ我が家に、疲れた体にむち打って、足取りも軽くだどり着いたのであります。

れんが工場

岩手県 小岩 敏夫

昭和二十一年五月三十日朝、百人くらいチャマ療養所をトラックに乗せられて出発した。

途中、れんがの建物、一般住民の土れんがの家、ボブラの並木が広い平野に点在している。ウズベック人の姿もある。日は照りつけるが、トラックが土煙を上げて走っているので、風に当たって涼しい。監視兵は運転助手席に一人、荷台の前方アングルに一人、こちらには立っている。私たちは四列になり後方を向いて座る。

二、三時間ぐらいでれんが工場のあるれんが塀の小さい収容所に着いた。塀の高さは三メートルぐらいで、塀の上には有刺鉄線が内側に向けて斜めに張られている。望楼が二つあり、監視兵が自動小銃を肩に掛けて立っている。門のところに収容所長以下将校三人、下

士官、兵隊十人ばかりが肩をいからして立っていた。

すぐ広場に整列、点呼と持ち物の検査が終わって宿舎に入った。寝台は板張りで、三段の押し入れのようになつていた。敷き物は布団の皮だけで、綿は少しも入っていなかった。毛布を三つ折りにして敷き、布団のかわりにした。翌日また、どこからか五十人ばかりやつて来た。

このあたりには民家も見えない。れんが工場の煙突から黒い煙が出ている。この工場で働くのだと思った。満州を出るとき一緒だった人はもう二、三人しかいない。別れ別れになつてしまったのだ。

三日目より仕事についた。土を水で練つて型枠に入れ、れんがの形にして天日に干す組と、干せた土れんがを一輪車で窯の中に入れたり焼きれんがを窯から出す組とに分けられた。私はれんがを焼く粉石炭を箱付きの一輪車で窯の上に架けられた橋を渡つて運ばせられた。窯の上には直径二十センチぐらいの穴が無数にあり、そこへロシア人の女が石炭を入れて燃やし、れんがを焼くのであった。一か月ほどして土れんがの運

搬組に回された。

ロシア人の監督にソルダート、ダワイ、スカレ、(兵隊早くやれ)と言われ、一輪車を持たされた。一輪車は木製で、車は二十センチぐらいの鉄製で、十五センチから二十センチの鉄板を敷きその上を生れんがを積んで押すのです。生れんがは重い、脱線させて倒してしまい、土れんがを壊すことたびたびでした。監督にれんがを壊すな、よくないと怒鳴られる。二か月くらいで、九十枚も積んで一日十五回ぐらい押した。製造のほうはノルマを達成して五十ルーブルぐらいもらえるのに、運搬組は苦勞してもノルマ一〇〇%にならないので、銭はなし。

土れんがは重く腕と腰に力が必要なので、体がもてない。土れんがで手の指の皮がすりへり血も出る。食事は悪い。エン麦、アワなどのかゆで、エン麦などは殻を口から出しながらすすする。野菜スープには砂糖大根、馬鈴薯などが少し入つていた。飯盒で三分の一ぐらい。とても腹いっぱいにはならない。空腹を感じる日々、激しい労働と四十度を超す炎熱で体は次第に弱つてき

た。

ここは中央アジア、ウズベック共和国アンジジャン、製造組は銭がもらえるので、たばこ、パン等をロシア人に頼んで買えた。私たちは銭もないので指をくわえて見ているだけ、こちらがよけいに苦勞しているのに。そこで、この過酷な労働に抗議するため、私たちは二十人ばかりで収容所、工場に対してストライキ（座りこみ）を行った。

監視兵は工場の作業場の周囲に立っている。収容所の役人、工場側は驚き、所長、将校、工場長、監督が集まった。彼らは、ソルダートどうして働かないと怒鳴った。要求は食事の改善、ノルマの引き下げ、衣類の支給の三つだった。所長は「働かないとアングレン（昔、ロシアの罪人が流された所）の炭鉱に送るぞ」と言っておどしたが、私たちはおどしには負けなかった。昼食も取らず、一日頑張った。どんなことを言われてもピクともしない。所長が食糧の増量とノルマの引き下げを約束したので、また働くことにした。それでもノルマ一〇〇%を達成することはできなかった。

捕虜でも人間だ、生きる権利はあるはずだ。

私たちは冬の軍衣袴しか持っていなかった。下着はチャマを出るとき、ランニングとパンツ一着ずつ支給、着替えはなし。パンツが破れたのでランニングシャツのいいところを切って補修した。靴は木製で、上の方は布で底は木製なので、歩きにくい。

作業にははだしで、上半身は裸、下はパンツ一枚で五月より十月まで通した。六月、七月、八月は酷暑で毎日四十度を超した。灼熱の太陽、風もない、雨も降らない、皮膚が五回もむけ、体の色は黒々となった。はだしで働くので足の裏は厚く固くなり、痛みを感じなくなった。夏の間は朝六時より十一時まで、午後は五時より八時まで作業、昼間は休み。

アンジジャンは水が悪く、生水は飲めない。わかしただ湯だけ飲む、冷たい水は飲んだことはない。入浴は一週間に一回だけ、日曜日に街に行きシャワーを浴び、泥を洗い落とす。食事は相変わらず悪い。瓜かトマトだけの食事のこともたびたびあった。れんが工場には食う草もなかった。大陸は夜が寒い。布団もなく、毛

布一枚しかない。

兵隊は病気になるっても、三十八度以上の熱か外傷がなければ休ませられない。頭が痛くとも神経痛でも休まれない。下痢すると、看護婦が来て兵隊を庭に並べ同時に大便をさせ、赤便か白い粘液便が出ないと休ませない。私は足の裏に底豆ができたので医務室に行った。日本の軍医は診てから「すぐ切る、麻酔がないが我慢しろ」と言って、寝台につかまって切ってもらった。痛い痛くないの話にならない、脂汗が出た。それで三日間休ませてもらった。

夕方になると大きなマラリヤ蚊がたくさんいて、遠慮なく裸を刺す。マラリヤ病人も多く出た。高熱を出して苦しむ姿、家族には見せたくないと思った。

ウズベック人は回教で、一日に何回か太陽を拝む。日中には綿入れを着て外に出る。ウズベック人は男も女もはだしで歩く。

アンジジャンも緑の多い町のようにあったが、見物したことはない。十一月になって長袖シャツと下ズボンが支給された。

今後このようなことがないことを祈ります。抑留生活はつらかった。

我が青春のあの日あるとき

岩手県 本宮 龍平

東北満からの逃避行

昭和二十年十月二十六日に頭道河子部落の対岸に着して大休止、野営すべく準備していた。突然、白旗を掲げ、満軍の下士官らしい者が野営地に向かっているので、騎兵操典に基づき、通して聞いたところ、「日本は無条件降伏をした。関東軍は各都市部近郊において収容され、祖国に帰る日を待っている」、「当面は対岸の頭道河子部落の保安隊に身を寄せ、ソ連の武装解除に応ずるべきである」と。

今までも何回もこのような情報があったが、部隊長は幹部を集めて協議した。今や、これ以上の行動は犠牲者を出すのみであるとの判断から、隊長は武装解除